

平成 25 年度研究報告書

研究代表者

所属 島根大学第二内科

氏名 木下芳一

研究テーマ：

好酸球性食道炎と好酸球性胃腸炎患者のヘリコバクター・ピロリ感染率を明らかとするための症例対照研究

研究者：

木下芳一、古田賢司、足立経一、相見正史、石村典久、佐藤秀一、石原俊治

研究概要：

(目的)

食物に対する慢性アレルギー疾患であると考えられている好酸球性食道炎と好酸球性胃腸炎は最近増加の著しい消化器疾患として注目を集めている。ところがこれらの疾患が増加している原因は明らかとはなっていない。ヘリコバクター・ピロリは5歳以下の小児期に胃への慢性感染が成立し Th1 系の免疫を強く誘導することが明らかとなっている。最近数十年間は日本人のヘリコバクター・ピロリの感染率が激減しており、感染陰性者が増加している。本菌の感染陰性者は Th1 系の免疫が発動しないため、Th2 系の免疫が有意な状態で成長すると考えられ、これがアレルギー発症の原因となっている可能性が考えられる。ところがヘリコバクター・ピロリ感染率を好酸球性食道炎と好酸球性胃腸炎患者を対象として日本人で検討が行われたことはない。そこで本研究は好酸球性食道炎例と好酸球性胃腸炎例のヘリコバクター・ピロリ感染率を年齢と性別を一致させた対象者と比較することを目的として実施した。

(方法)

すでに診断が確定している好酸球性食道炎例 18 例と好酸球性胃腸炎 22 例を疾患群とする。コントロール群はヘルスサイエンスセンター島根を健康診断目的で受診したいわゆる健常者とした。疾患例 1 例について健診受診例を年齢と性別を一致させて 3 例づつ当てはめ好酸球性食道炎のコントロール群 54 例と好酸球性胃腸炎のコントロール例 66 例を設定した。

疾患群は保存血清を用いてヘリコバクター・ピロリの感染の有無を判定した。コントロ

ール群はヘリコバクター・ピロリの感染は健診の一貫として測定されているためそのデータを利用して感染の有無を判定した。

(結果)

好酸球性食道炎例 平均年齢 51 歳、男性 11 例、女性 7 例、ヘリコバクター・ピロリ感染陽性率 22.3%

好酸球性食道炎のコントロール例 平均年齢 51 歳 男性 33 例、女性 21 例、ヘリコバクター・ピロリ感染陽性率 55.5%

好酸球性胃腸炎例 平均年齢 49 歳、男性 12 例、女性 10 例、ヘリコバクター・ピロリ感染陽性率 22.7%

好酸球性胃腸炎のコントロール例 平均年齢 49 歳、男性 36 例、女性 30 例、ヘリコバクター・ピロリ感染陽性率 48.5%

であり、統計学的な有意差をもって好酸球性食道炎と好酸球性胃腸炎例はそれぞれのコントロール例に比べてヘリコバクター・ピロリ感染陽性率が低かった。

(考察)

本研究から好酸球性消化管疾患の患者のヘリコバクター・ピロリ感染陽性率が低いことが明らかとなった。ヘリコバクター・ピロリ感染は Th1 系の免疫を誘導することが知られており 本菌の感染例では Th2 よりも Th1 系の免疫が有意であることが知られている。アレルギー疾患は Th2 免疫有意な個体に発症しやすいことが知られているためヘリコバクター・ピロリ感染が陰性で Th2 免疫有意な個体に食物に対するアレルギー疾患である好酸球性消化管疾患が発症しやすくなっているものと考えられる。日本においてはヘリコバクター・ピロリ感染の陽性率は年々低下しており今後は非感染者が増加していく。このため好酸球性消化管疾患の患者数は増加していくことが予想される。

文献

本研究の内容はすでに

Furuta K, Adachi K, Aimi M, Ishimura N, Sato S, Ishihara S, Kinoshita Y. Case-control study of association of eosinophilic gastrointestinal disorders with Helicobacter pylori infection in Japan J Clin Biochem Nutr 53: 60-62, 2013

として原著論文として発表している。

参照いただければ幸いです。